



## 召喚の儀

1

時に主人の代わりにモンスターと戦う力になり、時に主人の落ち込んだ心を癒やし、 それは、主人と生涯を共にするパートナー。 隣に座って

一緒にご飯を食べる存在。

家族や友達や恋人とはまた違った、新しい関係だ。

十五歳になり、僕は相棒と出会うための資格を得た。

大好きな冒険譚に描かれた、 数々の英雄『テイマー』たちに憧れて、 僕も従魔を手にする。

野生モンスター、見知らぬテイマー、伝説に語られる恐るべき怪物。そんな強敵たちとの戦いを

熱望し、僕は目を開けた。

「キュルキュル!」

「……えっ?」

可愛らしい鳴き声と、 小さな小さなその姿に、 僕は目を丸くしてしまった。

6

\*\*\*\*\*

夕日で赤く染まった村の広場に、木剣を打ち合わせる乾いた音が鳴り響く。

息を切らす僕の目の前に振り下ろされる木剣。

僕は反射的に、 右手に持った同じ木製の剣を掲げるが、 呆気なく弾かれてしまった。

「ほら、 ルゥ! ちゃんと受け止めろよ!」

叱り声に渋々従い、取り落としそうになった木剣を握りなおして構えを取った。

だが、 一般的な男子と比べて明らかに肉付きが悪い……ともすれば女子にすら見間違われること

もある僕では、片手で木剣を構えるのもおぼつかない。

次の瞬間、耐えきれないほどの衝撃が手に走り、僕は堪らず尻餅をついた。

「ぐっ……!」

その無様な格好を見て、二度の攻撃を見舞った少年が、 わざとらしいため息を吐く。

「はぁ……。しっかりしろよな、 ルゥ。 せっかく俺が稽古つけてやってんだから」

······どの口が言うのだろうか。

返すことができなかった。 僕は稽古をお願いした覚えなんてないのに。 そんな身勝手を押し付けてくる彼に、 僕は何も言い

ツンツンに尖ったブロンドの短髪に、 ヤンチャな感じで、関わることが躊躇われる男の子。 布の服をラフに着崩していて、 見るからに活発

僕と同じ村に住んでいて、昔から意地悪をしてくる、 リンド・ラーシュ君だ。

僕たちの様子を傍らから見ていた他のいじめっ子たちが、笑いながら彼に声を掛けた。

「俺たちは止めたからな」

「リンド、

そのくらいにしておいてやれよ。また泣くぞ、

そいつ」

当然、彼はやめない。

その声に後押しされるように、 リンド君は木剣を上段に構える。

僕は剣を握ることも忘れて、 格好悪く両腕を掲げた。

だがそのとき……

リンドー!」

どこからか、怒りを孕む少女の声が聞こえてきた。

その声に反応して、頭上の木剣はピタリとその動きを止める。

周りのいじめっ子たちは、 まるでモンスターの襲撃にでもあったかのように、 慌ててこの場から

逃げ去っていった。

「やべっ、ファナが来たぞ!」

8

しかし、リンド君だけは動かない。

すぐに一人の少女が駆け寄って来た。

柔らかそうな頬っぺたの可愛らしい顔。 風に揺れるショートカットの茶髪と短いスカー トが、 元

気そうな印象を与える。

物心つく前からずっと一緒にいる幼馴染、 ファナ・リズベルだ。

ファナ」

木剣を構えていたリンド君は、 それを隠しもせずファナに声を掛けた。

その顔は心なしか、少しだけ嬉しそうに見える。

リンド君が僕をいじめて、ファナがそれを止めに来てくれる。昔から変わらない。

彼は、僕をいじめればファナが来てくれると分かっていて。僕の方も、 ファナが助けてくれるの

だと、心のどこかで思ってしまっている。

全速力で駆け寄ってきた彼女は、リンド君の胸元に掴みかかる勢いで詰め寄った。

「リンド! またルゥのこといじめてたでしょ!」

「いじめじゃねえ、稽古だよ、稽古。こいつがどうしてもって言うから」

「ルゥがそんなこと言うわけないじゃん! どうせまたあんたが無理やりルゥを巻き込んだんで

ルゥに謝ってよ!」

しかしリンド君は、やなこった、と言ってスタスタと歩き去ってしまう。

その後ろ姿を見届けたファナは、心配そうな表情で、 地面に膝をつく。

「大丈夫、ルゥ? どこか怪我しなかった?」

「だ、大丈夫」

僕は労わってくれたファナに、 いつものようにお礼を言おうとする。

「あ、ありが……」

「まったくもう、ルゥも嫌なときは嫌ってちゃんと言わなきゃダメだよ。そんなんだからあいつら

にいじめられちゃうの。分かった?」

「……う、うん。ごめん」

なんか逆に怒られてしまった。

だけど、 少しだけ怖い顔をしていたファナは、 次いで大きく胸を撫で下ろす。

「まあ、怪我がなくてよかったよ。明日は大切な儀式があるからね。 怪我なんてしてたら、

影響が出ちゃうかもしれないし」

「そ、そうだね」

彼女の優しさに、 僕自身もホッと息を吐くが、またしてもお叱りムードに。

「私たちも明日、立派な大人になるんだから、 ちゃんと自覚してよ、 ルゥ」

「……う、うん。分かった

その情けない返事を素直に信じたとも思えないが、 ファナは大きく頷いて立ち上がった。

10

そして、 いまだ地面に座り込んでいる僕に向けて、 手を差し伸べてくれる。

「そんなんじゃ、『召喚の儀』で授かったパートナーに、格好悪いと思われちゃうよ

 $\lceil \dots \rfloor$ 

優しさに溢れたその手を見つめて、僕は固まってしまう。

召喚の儀 それは、十五歳になった者が受ける、成人になった証とも言える儀式だ。

女神様が授けてくれる。 モンスターの助力なしでは成り立たないこの世の中では、 成人になると自分専用のモンスターを

分からない。 モンスターの種類はたくさんあって、どんなモンスターを授かるかは、 儀式を行なってみないと

ターを授かったかによって、その人の価値が決められてしまう場合だってある。 希少性や能力の有用性、単純な力の強さによってランク付けされていて、どのランクのモンス

人と魔物の主従関係--それは世界の常識で、 ありふれた光景。

従魔を手に入れてこそ、 真に大人の仲間入りを果たせるということなのだ。

そしてその従魔を手に入れる儀式こそ、召喚の儀だ。

僕たちは明日その儀式を受け、 相棒と出会うことになる。

その相棒に格好悪い姿を見せるのだけはいけない。

情けない僕にしては相当な覚悟を抱き、差し伸べられた幼馴染の手を取った。

こんな僕でも、 明日、大人になることができるのだろうか。

生涯を共にするパートナーと出会えば、 何か変えられるのだろうか。

その答えは……そしてパ ートナーとなる従魔は、 明日にならなければ分からない。

\*\*\*\*\*

辺境の地にひっそり佇む、人口はおよそ五百人ちょっとの小さな村だ。

そこそこ古くからあるらしい村で、代々受け継がれている掟もかなり珍しいものがある。

それでも、雰囲気自体はとても和やかだ。

最近では子供の数も増えてきて、賑わいを見せている

それが、 僕の生まれ育った故郷だ。

そしてそんなパルナ村では明日、大切な儀式が執り行われる。

十五歳を迎えた子供たちが対象となる、 女神様から従魔を授かるための召喚の儀。

人々がモンスターと二人三脚で歩んでいくこの世の中では、 儀式で授かったモンスターの適性に

11

くらい大切な儀式を、 合わせて職業を選ばなければならない。言ってみれば、その人の天職を見極めるようなもの。 僕は明日、ファナやリンド君など、村の子供たちと一緒に受ける。

12

本当にこれで立派な大人になれるのだろうか?

そんな疑問を胸に、僕は自宅まで帰ってきた。

僕の家は、丸太を組み合わせて作った、簡素な掘っ立て小屋のような建物だ。

「……ただいま」

玄関に入るなり、僕は独り言のようにそう呟く。

幼い時に両親を失った僕は、 普段なら家の中から返事が来ることはない。 現在、父と母が生前に残してくれたこの小さな家で、 この家には僕一人しか住んでいない ずっと一人暮 いからだ。

らしをしている。

どうにか家事や炊事が自分でできるようになってからは、

ずっと一

村の人たちに育ててもらい、

人で生活をしてきた。

それは今でも変わらない。

出てしまう。 だから、家に帰ってきて "ただいま』を言う意味はほとんどないんだけど、 ついつい口をつい

それはたぶん、 いつだったか、 返ってこないはずの 、おかえり、という声を聞いてしまったから。

そして今日も……

「おかえり~」

少し間延びした幼い少女の声が聞こえてきた。

しかしそれは、家の中からではなく、 玄関に入ったばかりの僕の後ろから発せられていた。

僕はジト目になって振り向き、 声の主に対して疑問を投げかける。

「一緒に帰ってきて、゛おかえり゛はおかしくない?」

「いいんだよ。ルゥがルゥの家に帰ってきて、それを私が見ていたんだから。 それで私は、 おじゃ

ましま~す」

「……はい、いらっしゃい

そう言い合って、僕とファナは家に上がった。

幼馴染のファナは、小さい頃から何かと僕の面倒を見てくれている。

一人で住む僕を寂しがらせないように度々遊びに来てくれたり、仕事の手伝いで疲れた僕のため 家でご飯を作って待っていてくれたり。

期待してしまう。 だから一人で家に帰っても、 そんなファナの〝おかえり〟 が聞こえるのを、 僕はいつもどこかで

れた。 今日は、 いじめられた僕を案じてか、 ファナが 、晩ご飯を作りに行ってあげる。 と提案してく

特に断る理由もなかったので、 僕は嬉しい気持ちを隠しつつ了承したのだった。

自分で作るとあんまり美味しくないし。

14

「じゃあ、 ルゥは座って待っててね」

「うん」

お言葉に甘えて、僕は居間に置かれたテーブルにつく。

ご飯の準備を始める幼馴染の背をぼぉーっと見つめていると、 不意に彼女が口を開いた。

「そういえば明日ってさ、 私たち召喚の儀を受けるよね」

「えつ……う、うん」

「それでさ、女神様から授かったモンスターに合わせて、 お仕事を選ばなきゃい けないじゃん?

それってなんか理不尽じゃない?」

何か真面目な話をするかと思いきや、ただ愚痴が言いたいだけみたいだった。

みんなそうしているから、仕方がないんじゃない?」

「でもさ、 もし将来お菓子屋さんになりたい女の子がいたとして、授かったモンスターがアンデッ

ド系の、スケルトンやマミーだったら、その夢は絶対に叶わなくなっちゃうと思うんだよね」

「……まあ、確かに」

職業によってそれぞれだけど、授かったモンスターに合わせて仕事を選ぶのが定石だ。そうしな

いと、確実に不利になる。従魔は生涯を共にするパートナーだから。

ファナが言った通り、 アンデッド系のモンスターを授かったとしたら、 お菓子屋さんよりも衛兵

や狩人の方が活躍できる場は多くなると思う。

しかしそれはお菓子屋さんを目指す女の子にとっては本意ではない。

確かに理不尽すぎる気もするけど……

「今の時代じゃ、授かったモンスターに合わせて職業を選ばなきゃ、 絶対に不利になっちゃう。

れで不幸になるくらいなら、やっぱり仕方がないことなんじゃないかな」

晩ご飯の準備を進めるファナの背に、僕は僕なりの考えを語ってみた。

しかし、 一生懸命考えた末に辿り着いた結論は、 ファナの気の抜けた返事で一蹴されてしまう。

「そっか~」

聞いてきたのはそっちなのに。

僕は、無駄だと思いつつもとりあえず続けた。

「それに、 才能を可視化できていると思えば、それって結構幸せなことなんだと思うよ\_

従魔は、言ってしまえば才能そのもののように思える。

叶えたい夢と授かったモンスターが一致しなかったとすれば、 やる前から不向きだと分か

るという見方もできるから、ある意味幸せだと思う。

彼女は首を傾げつつも、 僕が言ったことを理解してくれたみたいだった。

「でもさ……ルゥだって、 もし、 なりたいものと自分の才能が合ってなかったら、 嫌だなぁって思

別になりたいものなんて

まう。 僕は `なりたいものなんてない゛と返そうとしたが、それは驚くべき一言によって、<br />
遮られてし

16

「冒険者に憧れてるんだよね、

ルゥ」

それを聞いて、 危うく椅子から転げ落ちそうになった。

寸前のところで踏みとどまった僕は、 料理を続けるファナに叫びにも似た声を上げた。

「な、なんでそのことを!」

そう言って彼女は、背中を向けたまま居間の端っこを指さす。「ごめんごめん。掃除してるときに、たまたま見つけちゃったんだよね

そこにある小さなテーブルの上には、数冊の本が積み上がってい

村の仕事の手伝いでコツコツと貯金をして、 少しずつ揃えていった本たち。 あらゆる英雄たちの

冒険が描かれた、子供っぽくて恥ずかしい、僕のコレクションだ。

「えっ……と……」

「いやぁ、なんか黙っているのも気が引けて、 つい。 ごめんね

ていうか、ベッドの下の、さらに奥の方に隠していたはずなのに・

唖然とする僕をよそに、ファナは追い打ちを掛けるかのように聞いてくる。

「それでルゥは、 冒険者になりたいの?」

「えつ……えっと……」

冒険者とは、主にモンスター討伐を生業としている者たちのことだ。

それは、 召喚の儀で授かった従魔を巧みに操り、 時に自らも一緒に戦いながら、 凶暴なモンス

ターを討伐していく職業。

世界には、召喚の儀で授かるようなモンスター以外にも、 野生の凶暴なモンスターたちが多数存

在する。 冒険者はそれらを討伐する貴重な存在だ。

僕は密かに、その冒険者という職業に憧れを抱いている。

いやこんな本まで所有しているんだから、 密かにとは言えないのかもしれない。

熱烈に、貪欲に、僕は英雄に憧れている。

だけどその気持ちをファナに言うのは、

なんだか躊躇われて、

黙り込んでしまった。

「隠さなくてもいいんだよ?」

そんな僕の心を見透かしたみたいに、

やがて僕は渋々ながら -おそらく真っ赤になった顔で ^うん、 と小さく頷い

彼女は優しく言った。

ファナの小さな笑い声が聞こえてくる。

不意に腹が立ってきて、 僕は思わず言い返していた。

「僕だけ言うのは不公平じゃないか。ファナの夢も教えてよ」

ファナは晩ご飯を作る手を止めた。

ても聞いた覚えがない。 勢いで聞いてみたけど、 幼い頃から親しくしているファナの夢というのは、 改めて思い返してみ

そう不安に思っていると、ファナが言い辛そうに口を開いた。もしかして、まずいことを聞いてしまったのだろうか。

私は……」

唐突に訪れた数秒の静寂。

答えるのはファナの方なのに、 なぜか僕の方が緊張してきてしまった。

私もね……」

り、家中に焦げた臭いが広がってきた。 ファナが意を決したように口を開いた瞬間、 キッチンの奥からプシュ

僕とファナは反射的にそちらを向き、 絶望的な光景を目にした。

「ファナ! 焦げてる!」

「ご、ごめん!」

途中までは美味しく出来ていたはずなのに、 噴きこぼれてしまった鍋

明らかに底が真っ黒になっている。

ファナは大慌てで鍋の火を消し、後始末をする。

いつもの彼女なら絶対にこんな失敗はしない。

僕は信じられない思いでその状況を見守るが、 しかし先ほどの質問をうやむやにする理由にはな

「それで、ファナの夢ってさ……」

だが、言い切る前に彼女はこちらを向き、 なんでもないようににっこりと笑って答えた。

「私は……特にないよ」

思わず僕は口を閉ざし、 椅子の上で固まった。

先ほど彼女が口にしかけた答えと、 少し違う気がしたから。そしてその笑顔が、 どこか作り物め

いていたからだ。

るのは憚られた。 だけど、、、この話題はもうおしまい。 と言わんばかりのファナの態度を見ると、 それ以上追及す

価値のあるものは何も得ることができ

結局僕は、自らの恥ずかしい夢を暴露させられただけで、

なかった。

「……ずるいな 今日の晩ご飯もあんまり美味しくないんだから、 まったく救われない。

19

召喚の儀、 当日。 僕たちは村の教会に集まっていた。

教会の内部は子供達の声でがやがやと騒がしい。

召喚の儀を受ける子供たちが多いのはもちろん、大人たちも大勢見物に来ている。

年に一度の村の大イベントだから、仕方がないんだけど。

「よう、 ルゥ。お前も召喚の儀、 受けるんだな。本当に十五歳になったの

教会の端っこで周りの様子を窺っていると、不意にリンド君が声を掛けてきた。 僕のところまで来たらしい。

わざわざ友達の輪から外れて、

皮肉が篭もる挨拶に、僕は苦笑しながら頷く。

「う、うん。まあね……」

すると、 やり取りを見ていたのだろうか、 村人たちの間からファナが駆け寄ってきた。

「こらリンド!」

「何もしてねえっつーの」

彼女の声に、 リンド君は鬱陶しそうに顔をしかめる。

いった。 ファナは僕を背中に隠すように立ちはだかり、 リンド君は捨て台詞を吐いてこの場を立ち去って

「せいぜい格好いいモンスターを呼び出して見せろよな、 ルゥ」

相変わらず意地悪なことを言ってくる。

ファナは肩をすくめてため息まじりに呟いた。

「バッカみたい。授かるモンスターは自分で選べないっていうのに」

その通りだ。だからこそ、子供も大人もハラハラドキドキしているのだ。

ファナと雑談を交わすこと数分。ついに待望の召喚の儀が始まった。

「それではこれより、召喚の儀を執り行う。儀式の対象となる者は前へ」

パルナ村に一番近い街--グロッソから来た神父様の声が上がった。

召喚の儀を行うには、儀式について学んだ者、つまりは神父様の存在が不可欠だ。

辺境の田舎村にはそんな人物はおらず、大きな街から呼んでくるのが通例となっている。

神父様の指示に従い、 僕たちは教会の真ん中に集まり、彼が書いたと思しき召喚陣の前に一

先を競う子供たちに押しのけられ、僕とファナは最後尾となってしまった。

「それでは一人ずつ儀式を受けてもらう。両手を召喚陣の上へ」

その声を受けて、先頭に立っていた少年が元気よく返事をした。

そして言われた通り、膝をつき、召喚陣に両手を当てる。

22

円形の陣から真っ白な光が放たれ、教会の中を明るく照らし出した。

これが従魔召喚。生涯のパートナーと出会うための、召喚の儀。

針のように尖った白い毛に、獣らしい鋭い牙と爪。 光が収まると、召喚陣の真ん中に一匹のモンスターが出現していた。 恐ろしくも格好い i, 立派な白狼だ。

「ホワイトウルフ。Cランクモンスターだ」

神父様は手に持っていた本一 おそらくはモンスターの詳細が書かれた図鑑 に目を通し

そう宣言する。

周りからは大きな拍手と歓声が上がった。

「いきなりCランクモンスターかよ」

「今年は豊作かもな」

村の大人たちは口々に、 一人目の少年を称える。

Cランクモンスターは、 確かに素晴らしい結果と言っていいだろう。

モンスターにはそれぞれ、ランクというものが設定されている。

のだ。 応用性、 希少性。 この三つを総合的に判断し、 モンスター の価値 ランクを定めている

ランクは全部で六つ。

上からA、B、C、D、E、 Fo

ンスターを引き当てたあの少年の召喚の儀は、十分成功したと言っていい。 一般的にDランクモンスターを当てれば仕事には困らなくなると言われているので、 Cランクモ

パルナ村は元々、高ランクモンスターのテイマーたちを輩出することで有名だ。

かった。 昨年はどうやらあまり良い結果が残せなかったらしく、 大きく肩を落としていた人たちが

少なかったから仕方がないんだけど。 去年のこの時期は流行り病が猛威を振るっていて、 召喚の儀を受けた子供たちがそもそも

受けられなかった子供たちも集まったため、昨年に比べて倍以上もの人数となった。 それに対して今年は、十五歳になった子供たちが多いのみならず、 昨年病気のために召喚の儀を

おかげで村はかなりのお祭り騒ぎになっている。

一人目でCランクモンスターが出たとあって、 村人たちの期待は高まるばかり。

「それでは次の者、前へ」

控えめにガッツポーズをする少年に続き、 儀式は順調に進められていった。

「ラージホーネット。Dランクモンスター」

「ベノムスパイダー。Dランクモンスター」

リー トエイプ。Cランクモンスター」

神父様がモンスターの名前とランクを口にする度に、村人たちは拍手と歓声を上げた。

24

そして子供たちは一生を共にするパートナーと出会って、喜びの笑みを浮かべる。

早く僕の順番が回ってきてほしい。

わくわくしながら召喚の儀の列に並んでいると、神父様から驚きの声が上がる。

「び、Bランクだ! グランドゴーレム! Bランクモンスターだ!」

その声に教会の中にいる村人たちは全員、口を噤んで前方を注視した。

そこには、他のモンスターとは大きさも雰囲気もまるで違う、 巨人型のモンスターが鎮座していた。 頑丈な岩のブロ ックを積み上げた

「何……あれ……」

僕は驚きのあまり声を漏らしてしまう。

一目見ただけで、そのモンスターの強さ、 恐ろしさが分かる。

神父様が言った通りなら、あのモンスターの種族は力と堅さが自慢の、 ゴーレ

その中でも、 Bランクのグランドゴーレム。

誰がそんなモンスターを……

「リンドの奴、 いいモンスターを引き当てたみたいだね」

「えつ……」

不意に、 どこか忌々しげなファナの声が聞こえてきた。

僕の前に並んだまま身を乗り出して、前方の召喚陣を窺っていた。

見ると、 確かにグランドゴーレムの前で誇らしげに笑っているリンド君の姿があった。

彼が立ち上がったのと同時にグランドゴーレムが咆哮を上げ、 村人たちが盛り上がる。

「すげえ! Bランクモンスターだ!」

「よくやったぞ、リンド!」

<sup>-</sup>パルナ村じゃ何年ぶりだ!!」

初めにCランクモンスターを出した少年の時よりも一層、 教会の中は騒がしくなる。

彼にいじめられている僕でさえ、ついつい拍手してしまいそうになった。

数々の冒険譚を読んできた僕には分かる。

Bランクモンスターは、それらの物語に多数登場し、 現代の凄腕冒険者たちの 間でも主戦力に

なっている貴重な存在だ。

一説によると……Dランクモンスターを召喚できるのは五十人に一人。Cランクは百人に一人。

Bランクになると千人に一人と言われている。

その情報が正確かどうかは分からないけど、希少な存在であるのは間違いない

すると彼は周りの声援に応えた後、 いまだ唖然としている僕は、そんなモンスターを引き当てたリンド君に見入っていた。 列の最後尾にいる僕をまっすぐ見返してくる。

つも一緒に遊んでいる友達の方ではなく、 見物に来ている両親の方でもない。

僕と、そしてファナに、遠目からでも分かるくらい、勝ち誇った顔を向けてきた。

26

舌まで出していた。 それに対して、 ファナはムッと顔をしかめる。 見てろよと言わんばかりに袖をまくり、 ついでに

反対に僕は、わくわくしていた気持ちがすっかり萎えてしまった。

と同じか、それ以上のモンスターを呼び出せなければ、またからかわれるに違いない。 まさかリンド君があそこまで高ランクのモンスターを召喚するなんて、 思ってもみなか つ た。

不安を抱えて肩を落としていると、儀式はいつの間にか僕とファナを残すのみになってい

「では、残るはそこの二人だ。前へ来い」

「は~い」

 $\lceil \dots \rfloor$ 

気楽に返事したファナと違い、 僕は無言でとぼとぼと召喚陣の前に出る。

それを確認した神父様は、他の子たちと同じように、儀式のやり方を教えてくれた。

「それでは、 この召喚陣に両手を当てなさい。 それだけで従魔を呼び出せる」

ーは〜い」

再び気楽な声で応えると、 ファナは僕よりも前に出て、 にこっと笑った。

「それじゃルゥ、私から行かせてもらうね」

うん

異論はなし。

僕は意図せず今年のパルナ村の召喚の儀で、 大トリを務めることになった。

そしてファナは、召喚陣の前に膝をつく。

両手を陣に当て、 これからやって来るパートナーと心を通わせるように、 そっと目を閉じた。

瞬間、凄まじいまでの真っ赤な光が召喚陣から放たれる。

今までとは比べ物にならないほど強大な反応。

光は教会の中を赤一色に染め上げて、見物していた村人たちの目を容赦なく襲った。

そして僕たちは……召喚陣の中央にいる、巨大な影を目にする。

「こ……これは……」

神父様は、信じられないとばかりに声を漏らす。

赤い鱗をまとった爬虫類状の体。 はばたくだけで強風を起こしそうな巨大な両翼。 獣型モンス

ターにも負けない鋭い牙と爪。

それは、 あらゆる英雄譚で、 時に頼りがいのある味方として、 あるいは英雄たちを苦しめる凶

な敵として描かれる伝説上のモンスター、超が付くほどのレアモンスター……ドラゴンだった。 硬直していた神父様は、 はっとなって図鑑を開き、食い入るように目を通して叫んだ。

「フレアドラゴンだ! 召喚の儀で呼び出せる最高クラスの、 Aランクモンスターだ!」

しかし村人たちは先刻のように盛り上がったりはしない。

別のようだ。 パルナ村でも昔は、 Aランクのモンスターを呼び出す人がいたらしいが、ドラゴンとなると話は

28

皆どうしていいのか分からず固まっている。

僕もそのドラゴンを見上げて竦んでいた。突然、伝説上の魔物を目の前に召喚されて、

なことは絶対にない。 を使うこともできない。 召喚の儀によって呼び出されたモンスターは、主人に絶対服従。命令されなければスキルや魔法 だから、このドラゴンが自分の意思でこの場にいる誰かに襲いかかるよう

そう頭で分かっていても、 知らず知らずのうちに一歩引いてしまう。

だが、村人全員の恐怖は、 一人の少女のお気楽な声で、あっさり消え去ってしまった。

「うわっ、すごっ! Aランクモンスター!? やったー! リンドに勝ったー!」

村人たちを凍りつかせたフレアドラゴンの前で、ファナは嬉しそうに飛び跳ねる。

次いで召喚陣の中に踏み込んで、ドラゴンに手を差し伸べた。

「これからよろしくね、ドラゴンさん」

赤い鱗をまとったドラゴンは、 想像していたよりもだいぶ高い声で鳴い

次いでファナの手の下に頭を滑り込ませる。

という意思表示なのだろうか。

ファナがそれに応え、 数回ドラゴンの頭を撫でてあげると、またも可愛らしい声が教会の中に響

「あっ、声高いね。 もしかして女の子? スタイルい いからそうだと思ってたんだよお

ドラゴンにスタイルも何もないと思うんだけど。

細い体つきをしている。 だが、よくよく見てみると、彼女が呼び出したフレアドラゴンは、 加えて、どことなく顔が綺麗な気がするのだ。 僕が思い描くドラゴンよりも

恐ろしいというより、見入ってしまうような美しさがあるというか……

それに、体もそれほど大きくない。翼や外見の迫力のせいでいくらか、盛って、しまうが、

は大人一人がちょうど乗れるくらいだ。

下手したら、リンド君のグランドゴーレムの方が大きいかも。

モンスターにももちろん雄と雌があるので、 ファナの言う通り、 あ のフレアドラゴンは雌 なの か

もしれない。

時間が止まっていたかのように呆然としていた村人たちは、 フ アナのお気楽な声を聞 て我に返

る。そして、リンド君の時とはまた違った盛り上がりを見せた。 Aランクモンスターが出たぞ!」

「しかもドラゴンだ!」

「村全体に伝えろ!」

一眼りし、一眼でもガーン・フェーブ

当然だ。Aランクモンスターの中でもレア中のレア、ドラゴンなのだから。

騒ぎのせいでしばらく召喚の儀が中断され、僕の順番が残っていることが忘れ去られてしまうん

じゃないかと心配になるくらい、ファナに対する称賛は続いた。

だろう。 彼らはこの村の者ではなく、優秀な人材を見つけるために見学に来ていた、大きな街の人間たち 大人たちの中にはファナを街の衛兵や専属の護衛に誘う者、果ては結婚を申し込む青年までいた。

そして皆がようやく落ち着きを取り戻し、ついに僕の番がやってきた。

「では最後、そこの少年」

「は、はい」

僕はおずおずと召喚陣の前に歩み出る。

その最中、儀式を終えて見物に移っていたファナが手を振ってくれた。

「頑張れ、ルゥ! 私と同じAランクモンスター出しちゃえ!」

「あ、あはは……」

たぶんそれは無理。

しかし、そんな無茶な声援のおかげで、変な緊張感はなくなった。

村の大人たちはファナのAランクモンスターが見られて満足し、その余韻に浸って気分良く帰り

